

# POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」

第13号 1990. 12. 27

発行

北海道ポーランド文化協会

〒060 札幌市中央区北2西2

道特会館 NDA画廊内

電話 011-221-8672

## リレー随筆

### クラコフに想う

吉本康子

冬にしては雪が少ないこのごろです。地球温暖化のあらわれでしょうか。そんな札幌で、ポーランドのハ

NIPONV展を見に行きました。クラコフ国立美術館の協力によるヤシエンスキーのコレクションは、私に日本文化を再発見させてくれました。彼は、：：浮世絵は色彩の音楽、音楽が耳を愛撫するように目を楽しませる。という。この不思議な統合的感性は、東欧、クラコフの風土によって磨かれたに違いありません。

ヨーロッパの京都といわれ、バルザックも住んだことがあるクラコフには、コペルニクスを生んだヤギエウオ大学があり、近くの公園の樹木のたたずまいは、どことなく札幌の円山公園を思わせました。こうして、数年前訪れたクラコフを思い出すと、シヨパン、キユウリー夫人、パウロII世、連帯など様々なポーランドの顔が見えます。私は、これらの

光はいつまでも世界の人々の心を照らすと思います。

このような、文化の薫り高いポーランドと、ポーレを通して親しくなるひとときを、私は大切にしています。それは、ひごろ忘れかけている、何かをとりもどしてくれるからです。

この文化協会が今後も民主的に運営され、ひろく市民の気持ちを反映し、両国の文化の再発見に役立つことを期待しております。

(主婦、札幌在住)

### ポー日協会の

### 吉田さん札幌へ

ウツヂ市にあるポーランドー日本協会ウツヂ支部で「日本文化週間」を企画、実行するなど日本とポーランドの文化交流のために献身的に活動してこられた吉田勝一(よしだま

さかつ)氏がこのたび本協会の招きで来札されます。これを機会に本協会では、来年一月十日(木)午後六時から札幌クリスチャンセンターで第十三回の例会として吉田勝一氏を囲む懇談会をひらきます。吉田氏から最近の激動するポーランド社会における市民生活や、日本とポーランドの文化交流の実態などについてじっくりお話をうかがいます。さらに参加者との間の自由な質疑応答なども予定しております。これまで例会に参加されたことのない会員の方もお気軽にご参加ねがいます。

なお、講演終了後場所をかえて一般会員をまじえた新年会をおこなう予定です。

#### ◆第十三回例会

吉田勝一氏を囲む懇談会

日時 一九九一年一月十日

(木)午後六時より。

場所 札幌クリスチャンセンター

一三〇一室(札幌市北区

北七条西六丁目)

参加費 無料

◆新年会

日時 右の「懇談会」の終了後

場所 京王プラザホテル、レス

トラン樹林

会費 二千円程度(各自注文)

## 第三回総会開かれる

本協会の第三回総会が、さる十月二十八日午後五時三十分より札幌市の教育文化会館でひらかれました。総会に先だって午後五時ごろから、来年六月に開催予定のポーランド週間について懇談がおこなわれました。(くわしくは三ページの記事を参照してください)

総会ではつぎのような議案が提出され、質疑のあと了承されました。

### 一九八九一九〇年度事業報告

#### 【主催行事】

◆第九回例会 創立二周年記念ハイブシコードリサイタル(演奏 エリザベータ・ステファンスカ、ルコピツ)、十一月六日、ザ・ルーテルホールにて(後援 日本シヨパン協会北海道支部)

◆第十回例会 ポーランドの画家スタシスと語る会―芸術家と今のポーランド、二月七日、国際交流プラザにて

◆第十一回例会 ポーランド音楽について―解説とピアノ演奏(ワルシヤワ音楽大学ピアノ科リディア・コズベック教授、通訳 伊東孝之氏、

後援 国際交流プラザ)七月二十一日、国際交流プラザにて

◆第十二回例会 ポーランド映画の世界(第三回) クシシエトフ・キエシロフスキの「アマチュア」(解説 本間富雄氏、「人の目レンズの目」)、七月二十六日、大谷会館にて、(共催 イメージ・ガレリオ)

#### 【後援行事】

ポーランドのAMZPROS展V(十一月十四日より十二月二日まで、西武五番館赤レンガホールにて、主催ポーランドのAMZPROS展開催実行委員会)など計四件

【ポーランド語講習会】

◆第三回シリーズ 二月六日(火)より毎週一回計十一週間(初級)

◆第四回シリーズ 五月二十二日(火)より毎週一回計十週間(初級の中)

#### 【会議】

◆総会 十月十六日(月)午後六時三十分より、すみれホテルにて(演奏 横道朋子、真光孝美)

◆運営委員会(四回) 十二月十八日、四月二十四日、六月十八日、九月二十六日

## ハリーナさんを囲む

### 楽しいポーランド語

●第六期ポーランド語講習会を開きます。水準は初級の中(アルファベットが分かる程度)といたします。

【期間】 一九九一年一月二十三日(水)～三月二十七日(水)  
(毎週水曜日、十週間)

【時間】 午後六時三十分から午後八時三十分までの二時間

【会場】 北海道クリスチャンセンター  
(住所) 札幌市北区北七条西六丁目  
(電話) 七三六一三三八

【講師】 熊倉ハリーナ先生

【授業料】 一万円二千円(十回分)

【申込先】 北海道ポーランド文化協会事務局(札幌市中央区北二条西二丁目 電話 二二一八六七二)または灰谷(電話七〇二一四九三九)まで。

## 一九八九―一九〇年度の決算

### 【収入の部】

会費 六一三、〇〇〇円

その他 五二、四〇九円

小計 六六五、四〇九円

繰越金 二三八、六〇五円

仮受金 七二、一〇〇円

合計 九七六、一一四円

### 【支出の部】

事業費 三六〇、二五七円

連絡費 七三、七三七円

会合費 一三二、八五六円

事務費 七八、八四七円

小計 六四五、六九七円

仮払金 一〇四、四〇〇円

繰越金 二二六、〇一七円

合計 九七六、一一四円

## 一九九〇―一九一年度の事業予定

### 【主催行事】 通常の例会三回（講演会など）、ポーランド週間開催（九月六月頃、映画、展示、音楽会などの行事を集中的におこなう）

【ポーランド語講習会】 毎週一回十週間のシリーズを二回

【会議】 総会一回、運営委員会四回

## 一九九〇―一九一年度の予算

### 【収入の部】

会費 六一三、〇〇〇円

国際交流補助金 四〇〇、〇〇〇円

その他 二、〇〇〇円

小計 一、〇一五、〇〇〇円

繰越金 二二六、〇一七円

合計 一、二四一、〇一七円

### 【支出の部】

事業費 六〇〇、〇〇〇円

（使途） ポーランド週間、例会

# ポーランド週間に 多彩な提案

三回、ポーランド語講習会

連絡費 八〇、〇〇〇円

会合費 一二〇、〇〇〇円

事務費 八〇、〇〇〇円

小計 八八〇、〇〇〇円

繰越金 三六一、〇一七円

合計 一、二四一、〇一七円

さる十月二十八日、総会に先だつて「ポーランド週間」についての話し合いが行われました。これは、本年八月三日に公益信託「国際交流ホスピタリティートラストより、本協会に対して「ポーランド週間」開催のための補助金が交付されたことを受けて、「ポーランド週間」の催しものについて提案をさせていただくために持たれたものです。席上で多くの人たちからさまざまな提案がなされました。その内容はおよそ次のようなものでした。

①ポーランドの歴史、政治、教育、文学、音楽、映画、美術などについて連続講演はできないか。また、ポーランドの政治状況について今どうなっているか、解説してもらいたい。大使館の人などにたのめないか。

## 実行委員会づくりへ

十月二十八日の懇談会での提案にもとづいて、十一月二十七日の運営委員会では、「ポーランド週間」の具体的な企画、実行について話し合

われました。活発な討論の結果、「ポーランド週間」では①児童文学関係、②映像芸術関係、③音楽関係の三つの分野をとりあげることになり、次のように三つの実行委員会（の核となるもの）が組織されることになりました。

①児童文学関係 児童文学関係の資料、ポーランドの子供の絵の展示会、それらに関係した講演会などを行う。補助金は十五―二十万円程度。実行委員長は斎田道子氏。運営委員会からは小林、灰谷、布施の三氏が参加。

②映像芸術関係 東京の組織との連携を考えた上で、クヌスシェフ・ザヌーシの招待を考える。映画のあとの懇談会なども企画。補助金は三十一―三十五万円程度。実行委員長は霜田千代麿氏。運営委員会からは本間、小笠原両氏が参加。

③音楽関係 具体案はまだないが、ショパンコンクールに関係した写真展、懇談会などを考える。補助金は十万円程度。実行委員長は大竹貞氏。副会長の速藤氏と相談して決める。

訂正 吉田勝一（まさかつ）氏のことを本誌六号および八号で間違えて吉田正勝氏とご紹介いたしました。おわびして訂正します。

## 第14回例会 ポーランド映画の世界（第4回）

# ポーランドの巨匠たちの夜明け

### —ウッチ映画大学卒業製作展—

【日時】1991年1月25日（金）から29日（火）までの5日間

（上映開始時間）① 2:00 ② 4:30 ③ 7:00

（27日のみ）① 0:00 ② 2:00 ③ 4:30

【場所】イメージ・ガレリオ

（札幌市中央区南3条西6丁目 長栄ビル2階 TEL 231-9355）

【入場料】同封の入場券を持参したポ文協会員は無料。一般の方は  
前売り1,000円、当日1,300円

#### 〈 内容 〉

- BIERZ PIEĆ（ティク・ファイブ）、1972年、カラー、6分、Z. リブチンスキー作  
実験的な映画。ジャズ奏者の人影の二重撮りとオーバーラップ。色彩と幾何学模様の祭典。
- ZXY CHOPIEC（不良少年）、1949-50年、白黒、6分、A. ヴァイダ作  
（不明）
- XAPAC-ZXODIEJA（泥棒をつかまえろ）、1960年、白黒、6分、K. ザヌーシ作  
（不明）
- EROTYK（恋愛詩）、1960年、白黒、4分、J. スコリモフスキ作  
少女が鏡をみがくと、突然、男の影がうつる。その男は彼女に話しかける。少女はおの  
いてあとづさる—。
- ROZBIJEMY ZABAWĘ（パーティーをめっちゃめっちゃにするぞ）、1957年、白黒、R. ボランスキ  
作  
ちんぴらグループが映画学校に乱入し、そこで学生のパーティーを大混乱させる。有名なジ  
ャズメンがこの映画に参加した。
- KOPALNIA WUJEK（ブエク炭鉱）、1989年、13分、A. ガイエフスキ作  
戒厳令下、1981年12月に起きたブエク炭鉱のストライキの報告。スト鎮圧に火器が使われ、  
7人の炭鉱夫が殺される。
- EMERYTOWIEC（年金生活者）、1986年、6分、M. シェラフォフスキ作  
定年過ぎた老人に関する問題をあつかう。マチェイ・シェラフォフスキは1960年にピアウイ  
ストックで生まれ、1984年ウッチ大学を卒業。1988年にウッチ映画大学の監督ディプロマを得  
た。
- CHWIKOWE SPOTYKANIA（瞬時の出会い）、1987年、7分、J. マルシェフスキ作  
カメラマンの習作。エヴァ・ルービンスティンが父アルトゥール・ルービンスティンの故郷  
（ウッチ）を訪ねる。ヤチェック・マルフェフスキは1962年ウッチに生まれた。彼はウッチ映  
画大学の映像・テレビ学科を卒業。
- MÓJ MAXY EVEREST（我が小さなエベレスト）、1988年、11分、M. デンピンスキー作  
この短編は、山にのぼることそのものが、自分の人生の生き方のメタファとなったアルピニ  
ストを描く。登山中に様々なシュールレアリスティックなエピソードがかたられる。
- Z PODNIESIONYMI PEKAMI（手をあげたまま）、1985年、白黒、6分、M. パノフ作  
手をあげたままワルシャワゲッターに残されたユダヤ少年を撮った有名な写真から想起され  
た。M. パノフはユーゴスラビア生まれ。スコピエの美術アカデミーで油絵を学び、ウッチの  
映画 大学に留学し、監督科を卒業。

共催：北海道—ポーランド文化協会、イメージ・ガレリオ

事務局より ポーランドの<NIPPON>展開催実行委員会より本協会に同展の「カタログおよび解  
説」（アート紙カラー刷り、128ページ）が多数寄贈されました。希望者には無料でお送りしま  
すので、送付先の住所、氏名を明記して事務局までハガキでお申し込みください。